Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介致します

合田 直弘

今月のコラムで主役として取り上げるのは、7月のG1キングジョージ6世&クイーンエリザベスSの勝ち馬で、この会報が皆様のお手元に届く頃には目前に迫ったG1凱旋門賞を目指す有力馬の1頭となっているはずのポストポーンド（牡4、父ドゥバウィ）を管理するルーカ・クマーニ調教師である。

クマーニ師は、1949年4月7日にイタリアのミラノに生まれた。父は同国でチャンピオントレーナーの座に就くこと10度というセルジオ・クマーニで、母は女性騎手チャンピオンのエレーナ・クマーニという、密度の濃いホースマン血脈を継いで生まれたのがルーカ・クマーニである。彼はまず母の足跡を辿り、23歳の時にアマチュア騎手チャンピオンの称号を獲得。その後、父と同じ道へ進もうと決意した時、自らが拠るべきは祖国ではなく、競馬発祥の地・英国のそのまた競馬の中心地であるニューマーケットと思い定めて渡英。ヘンリー・セシルのもとで伯楽の流儀を学んだ後、76年に開業をしている。

82年にオールドカントリーで伊ダービーを制し、故郷に錦を飾った頃から若手調教師の旗頭として台頭。84年にコマンチランでセントレジャーを制してクラシック初制覇を果たし、トップトレーナーの仲間入りを果たした。88年にはカヤーシで、98年にはハイライズで英ダービー制覇も果たしている。

ちなみに89年の「アリーサ事件」――英オークスで1着入線したアリーサから禁止薬物が見つかり、同馬は失格となったのだが、これを不服とした馬主のアガ・カーン殿下が、英国にいた90頭余りの現役馬を全て引きあげるという騒動になった――の際、英国でアガ・カーンの馬を最も多く預かっていたのがクマーニ師で、師としては予期せぬ“とばっちり”で大スポンサーを失うという痛手を負っている。だが、そんな苦難を乗り越えつつ、欧州競馬の最前線に立ち続けているのがルーカ・クマーニである。

早くから海外遠征にも積極的で、83年にはトロメオでアーリントンミリオンを制し、このレースにおける初めての遠征馬による優勝を果たしている。88年にはインファミーとサドンラヴで、ウッドバインのカナディアン国際とEPテイラーSをダブル制覇。94年にはバランシアでBCマイル制覇を制している。

そして、97年にモンズでJC初参戦を果たし、2度目の参戦となった05年にアルカセットで見事にJC制覇を成し遂げている。

JCでアルカセットの手綱をとったのは、クマーニ師と同じイタリアはミラノ出身のフランキー・デトーリだった。フランキーの英国における騎手生活は、クマーニ厩舎の見習いからスタートしており、不世出の名騎手フランキー・デトーリの、いわば育ての親がクマーニ師なのであった。

ポストポーンドによるキングジョージ制覇はクマーニ厩舎にとって、11年3月のプレスヴィスによるG1ドバイデューティーフリー以来、4年4か月振りのG1制覇だった。G1から遠ざかっていただけでなく、14年は重賞制覇がわずか2つと、トップステーブルとしてはおおいなる不振に陥っていたのだが、キングジョージの2週間にはセカンドステップでドイツのG1ベルリン大賞を制覇し、スランプからの完全脱却をアピールしている。

キングジョージは道悪だったが、これ以外の3勝はGood to firmという馬場状態であげているのがポストポーンドだ。セカンドステップもまた、Good to firmで行われたG2ジョッキークラブSを制した実績がある馬で、つまりはともに固い馬場をいとわぬ馬たちである。ここは上昇機運に乗って、12年のマウントアトス以来となるJC参戦を果たして欲しいものである。

そして、英語、イタリア語の他、アラビア語も話す才媛で、CNNを中心に競馬番組のプレゼンターを務めている、クマーニ調教師の令嬢フランチェスカ・クマーニが、取材陣の一員として来日するようなことになれば、更に大きな話題を呼ぶことになろう。